

10

福島県
郡山市

女子の暮らしの研究所

若い女性が不安を語り合える場所をつくる

東日本大震災の後、それまでの暮らしが一変した。明日が見えない中、日塔マキさんは女子の目線で福島情報を発信する「女子の暮らしの研究所」を設立。「不安や悩みを抱える福島に住む若い女性が本音で語り合い、今後の暮らしについて考える環境をつくりたかった」と当時を振り返る。

取組のPOINT

ヒト 震災の脅威と向き合う

着眼点 女性目線で若い女性を支援

連携・協働 共通の想いでつながる

持続性 出店を増やし財源確保

DATA

取組主体 女子の暮らしの研究所
(株式会社GIRLS LIFE LABO)

取組内容 コミュニティづくり

人物紹介 代表取締役
日塔 マキ (にっとう まき)



福島県郡山市出身。制作会社勤務を経て、震災を機に、「女子の暮らしの研究所」を設立。不安を抱える福島在住の若い女性に今後の暮らしを考える場を提供。また、福島県の伝統工芸品と“かわいい”を融合させた商品の企画・販売などを通して福島を発信。

ヒト 震災の脅威と向き合う

自然に身体が動いたボランティア活動

東日本大震災の発生時、日塔さんは福島県郡山市のスーパーマーケットにいた。突然、けたたましく携帯電話の緊急地震警報が鳴り響く。間もなく、激しい揺れに襲われた。整然と並べられた周りの商品が音を立てて崩れ落ちる。揺れは予想よりも遥かに大きく、しばらく収まらなかった。揺れに足を取られながら、やっとの思いでたどり着いた避難出口から外を見ると、真っ暗な雲と吹雪。あまりの寒さと地震の恐怖で思わず身をすくめた。

自宅や近所に住む祖母のことが心配になり家路を急いだ。周囲は、屋根瓦や塀が崩れるなどの被害や、停電している一体も。避難所になっていた祖母の家近くのコミュニティセンターには大勢の人が押し寄せていた。「祖母の家は農家で納屋にお米がたくさんあったんです。そのお米でおにぎりを作って配りました」と日塔さん。何かしなければとの思いに突き動かされたボランティア活動は避難所に支援物資が届くまで続いた。

放射能の影響を心配し、県外へ避難

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、東京電力の福島第一原発にも甚大な被害を与えた。3月12日～15日にかけて、津波により損傷した同原発の1、3、4号機の原子炉建屋が水素爆発。国内の原子力発電所の事故で初めて住民の避難指示が発出される緊急事態となった。事故の経過とともに住民の避難範囲は、12日夕刻頃、同原発を起点に20km圏内は避難、15日には30km圏内まで屋内避難措置が指示された。

日塔さんが暮らしていた郡山市は原発から60km以上離れていたが、それでも放射線量は高かった。事故発生時、郡山市内では最高で毎時8.6マイクロシーベルトの放射線量を記録。これは、国が追って避難指示の目安とした値の2倍超だった。食べ物や飲み物はどうすればいいのか。このまま住み続けられるのか。数ヶ月間悩んだ末、放射能の影響を危惧し、日塔さんは自主的に県外へ向かう。



「peach heart」を立ち上げたメンバー
左から2人目が日塔さん

するときに差別されないか」「妊娠するのが怖い」など、不安に飲み込まれそうな女性たち。その支援のためにpeach heartは、お互いに何でも話せるコミュニティづくりや放射能の心配のない県外への保養ツアーなどを企画。また、放射能についてもっと知りたいという声があれば、専門家を訪れ勉強会なども実施。月1回ほどの割合で行った催しへの参加者は延べ200人以上に達した。その後、peach heartのメンバーは各自の道を歩み、日塔さんはこれまでの取組をさらに広げるべく2012年12月、「株式会社GIRLS LIFE LABO（ガールズ ライフ ラボ）」を設立、「女子の暮らしの研究所」の運営を開始する。

着眼点 女性目線で若い女性を支援

あまりにもかけ離れていた福島の情報

転職した東京で新しい日常が始まった。ある日、福島で甲状腺癌の疑いのある子供が見つかったという報道が流れたが、それを気に留める人は周りにはいなかった。震災から約9ヶ月。東京では震災も原発事故もなかったかのように生活が回っていた。一方で、福島の話といえば、「放射能は安全か」「原発はいるかいらないか」といったものばかりだ。職場などで耳にする情報は、自分の知っている福島とはあまりにもかけ離れたものだった。このままではいけない。きちんと福島の声を発信していくために、日塔さんは福島へ戻ることを決意する。

2011年11月、日塔さんを含む5人の女性が郡山市で「peach heart（ピーチ ハート）」という任意団体を立ち上げた。目的は、震災後に福島で不安を抱える若い女性たちが本音で語り合い、これからの生活について考える場所の提供だ。そうした場が必要だと感じた背景には、支援から遠ざけられた世代の存在があった。

何でも本音で話し合えるコミュニティづくり

「19歳になる知り合いの女性に、私なんか検査も無料では受けられないんです。見捨てられちゃったのかな。と呟かれたんです。愕然としました」。震災後、18歳以下は甲状腺の検査が無料（震災当時）で行われ、子供を持つ母親には母子避難やメンタルケアなどのサポートがあった。これは、18歳以下が放射能の影響を受けやすいという統計的な判断で「19歳以上でこれから母親になる世代」に対するサポートは不十分だった。

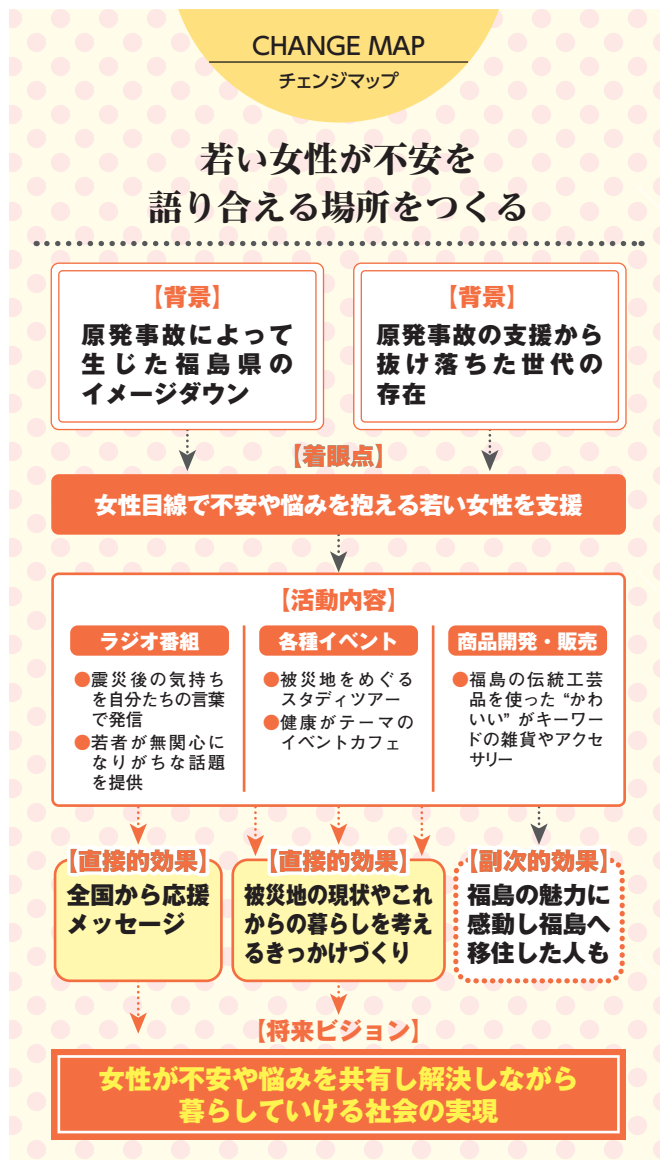
すっぱり抜け落ちたサポート体制への不満、さらに「将来病気になるかもしれない」「福島に住んでいて結婚



イベントカフェの様子



ガールズフェスの様子



連携・協働

共通の想いでつながる

研究員が在籍し、様々な取組を開始

「福島に住む女性がこれからの暮らしについて自分自身で考え、きちんと選択して、誰も泣くことがなく生きていける社会を作ろう」というコンセプトのもと活動をスタートさせました。『女子の暮らしの研究所』の名前にはそんな想いが込められています」と日塔さん。高校生や大学生、社会人までのコアメンバー約20名の女子たちが研究員として在籍し、様々な取組を行った。

団体の立ち上げ当初から始めたのは郡山コミュニティ放送のラジオ番組「LABOLABO (ラボラボ) ラジオ」。進行役は研究員の女子たちだ。震災後の気持ちを自分たちの言葉で伝え、震災後、暮らしと密接に関係する問題にも目を向けようと、放射能や原発を含む社会問題、法律・政治まで、多くの若者が無関心になっている話題を取り上げた。リスナーからは好評を博し、インターネットの動画サイトで視聴できたこともあって、全国から応援メッセージが寄せられた。

参加型の催しも多数開催された。「からだミーティング」と称したイベントカフェでは、広島市で産婦人科クリニックを営む河野美代子（この みよこ）医師と放射能と女性という共通項で連携。人体に及ぼす影響への理解を深めた。このほか、身体にやさしい無農薬野菜を使って料理を作るといったイベントまで、いずれも若い世代に新たな気付きや興味を促す趣向が凝らされたものだった。

福島の自慢できる資源や素材でものづくり

「Re・trip(リトリップ)～ふくしまの『これから』を考える旅」は、福島県内の被災地を研究員の女子たちがガイド役となって案内するバスツアー。株式会社JTBと連携し2012年～16年まで実施した。福島第一原発から20km圏内の南相馬市小高区などを訪れ、震災から一年以上が過ぎても避難した住民が戻れず、時間が止まってしまったかのような被災地の現状をより多くの人に知ってもらい、津波被害や放射能汚染の問題を伝えることが目的だった。

バスに乗車する際、ガイド役の女子たちが着用するのは青いワンピース。これは、被災地に行くという参加者の緊張感を少しでも和らげられるよう考慮したものだった。同時に、目立つコスチュームはTVや新聞などのメディアに取り上げられやすく、その点も福島の情報を広く伝える上で重要視したという。

2013年3月、ものづくりを通して福島の想いを発信するという発想から「Fukushima Piece プロジェクト」は始まった。第1弾は福島県会津地方の伝統工芸品「会津木綿」を使い8色で展開した「ふくいろピアス」。開発や流通では、同じ素材

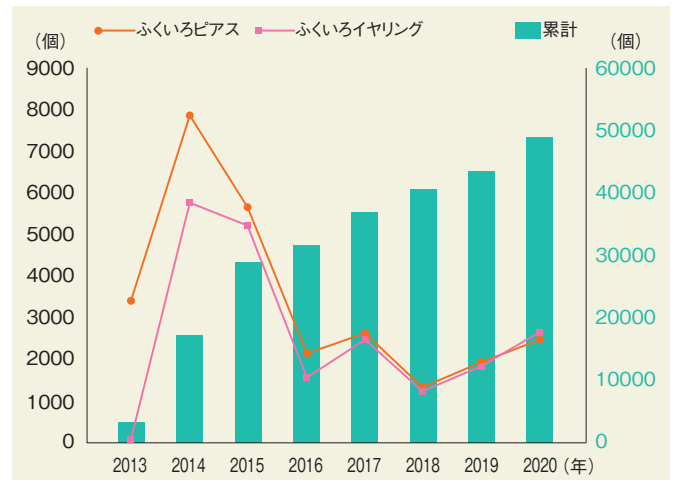
で商品を作る地元の企業「株式会社IIE」や「株式会社フェリシモ」、株式会社電通の「GAL LABO」、ヤフー株式会社の「復興デパートメント」と連携。2020年までに49,036個を販売した。

2014年3月には第2弾として会津漆器の技法を使ったアクセサリー「omoi no mi (想いの実)」を発売。研究所に所属する3人の漆職人が、震災後の女子の想いを4色の漆で表現したヘアゴムやピンバッジなどを「株式会社アーバンリサーチ」と連携し全国へ届けた。

続く第3弾としては、福島県の県産品振興戦略課の助成金を活用。「アッシュ・ペー・フランス株式会社」と連携し、福島県川俣町の老舗「齋栄織物」が作るシルク「フェアリーフェザー」を使った不思議な輝きのジュエリー「HITOTOKI-kasumi-」を開発・発売した。

日塔さんは「“かわいい”をキーワードにしたこれらの商品を通して、福島の女の子と全国の女の子がつながり、福島のことを考えるきっかけになれば」と話す。

「ふくいろピアス」「ふくいろイヤリング」の販売個数推移



持続性

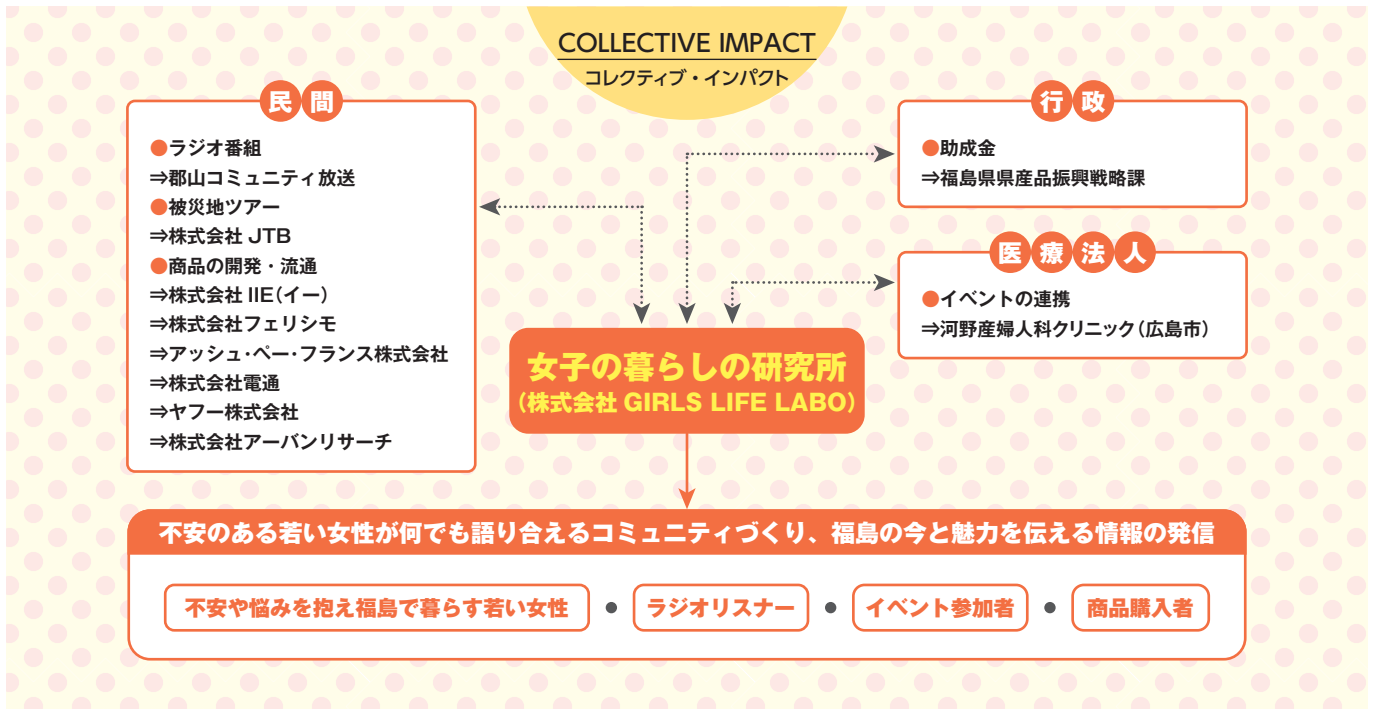
出店を増やし財源確保

福島にこだわったより良い商品を提供

震災から10年が経ち、若い女性が語り合えるコミュニティづくりは一段落を迎えている。力を入れているのは、取組継続のための財源確保。ショップやインターネットによる開発商品の販売に重点を置く。

商品の品揃えは、購入者からの要望もあり、雑貨・アクセサリーに加え洋服や小物など、ファッション全般を取り扱うまでに増えた。ただ、単に種類を多くしたのではなく、雑貨は福島県内の作家によるもの、洋服も南相馬のブランドをメインにするなど、福島県への想いは変わらない。

対面販売は、福島市の常設店だけでなく、2020年9月、福島県郡山市のうすい百貨店に、また2021年6月には期間限定で東京新宿マルイ本館に団体名と同じ名称のコンセプト



ショップを展開し、福島にこだわった商品が話題となっている。今後も各地の百貨店やショッピングセンターなどでの出店を予定している。

◆ 今後は年齢を重ねたからこそできる支援も

現在、福島での活動は研究員に任せて、日塔さんは沖縄県に住んでいる。「女性は特に、結婚したり、出産したりという節目の出来事で人生のステージが変わります。私も今、子育ての真っ只中で、これまでに経験したことのない、いろいろなつまづきを感じるようになりました」と日塔さん。自分自身が子育ての大変さを実感していることから、次の目標として子育て支援や家庭支援に取り組んでみたいという。

こうした支援には何が必要なのか、現状を知るために、日塔さんは保育園や障がい者施設等で、子育て支援や保護者支援を行っている。「本年度中に、保育士の資格を取ります。今後の取組については女子の暮らしの研究所のプロジェクト

にするか、屋号そのものを変えてしまうかまだ決めていません。いずれにしても、女性が自分らしく暮らせるために何ができるかを考えています」。

まだ母親ではない世代の支援から、子供を持つ世代の支援へ。女性の不安や悩みに向き合う真摯な姿勢はそのまま、取組は新たなフィールドへステップアップしている。



青のワンピースでガイド役を務める研究員



展示会の様子

福島の伝統工芸品と“かわいい”を融合させた「ふくいろピアス」



本事業例の問い合わせ先

女子の暮らしの研究所 (株式会社 GIRLS LIFE LABO)

福島県郡山市中町13番1号 うすい百貨店2階
E-mail : info@girls-life-labo.com
HP : http://www.girls-life-labo.com

福島女性のためのコミュニティ。研究員として所属する女子たちが商品開発やツアーガイド、イベントなどを企画・運営し、震災後の福島の今と魅力を発信している。